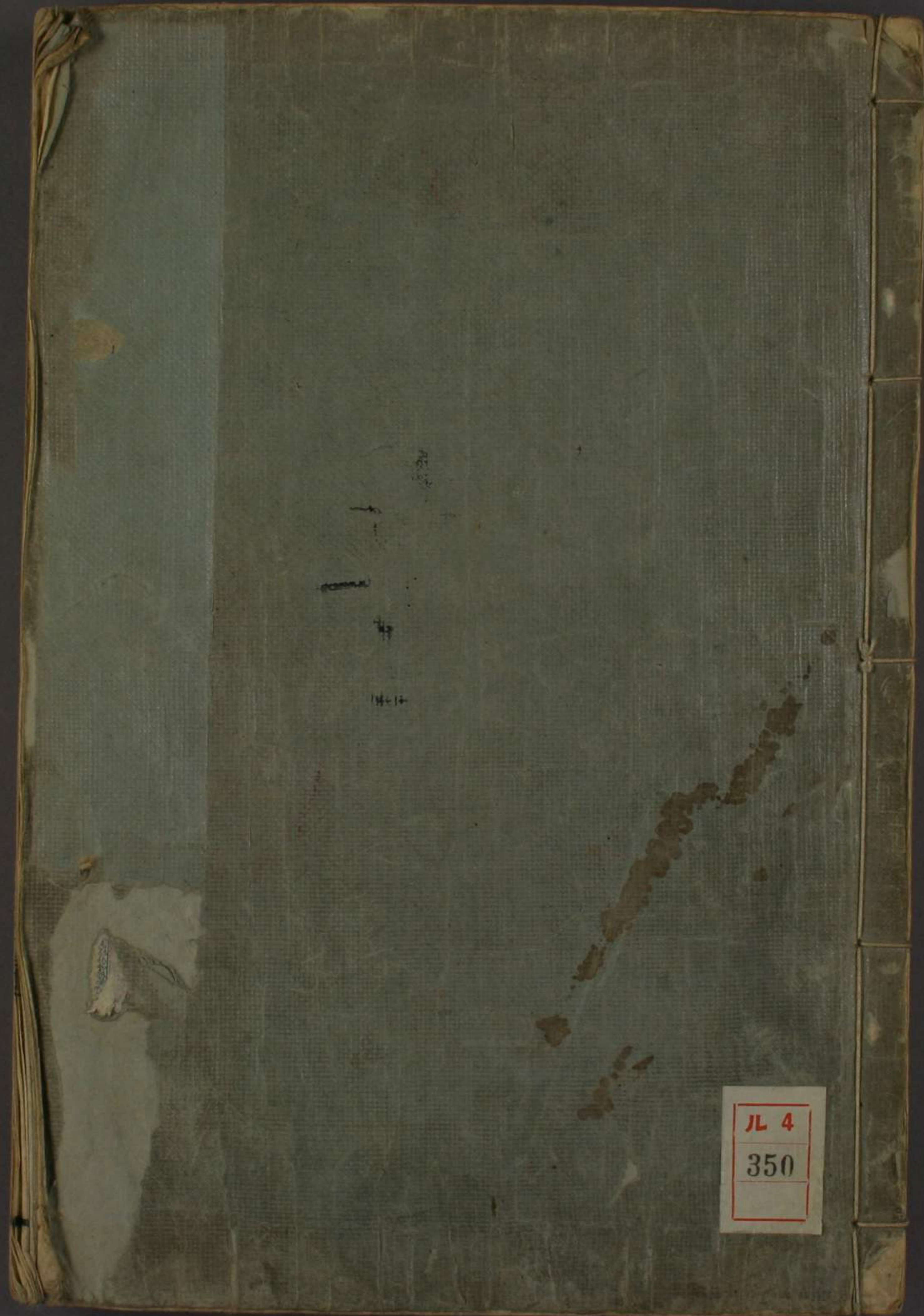
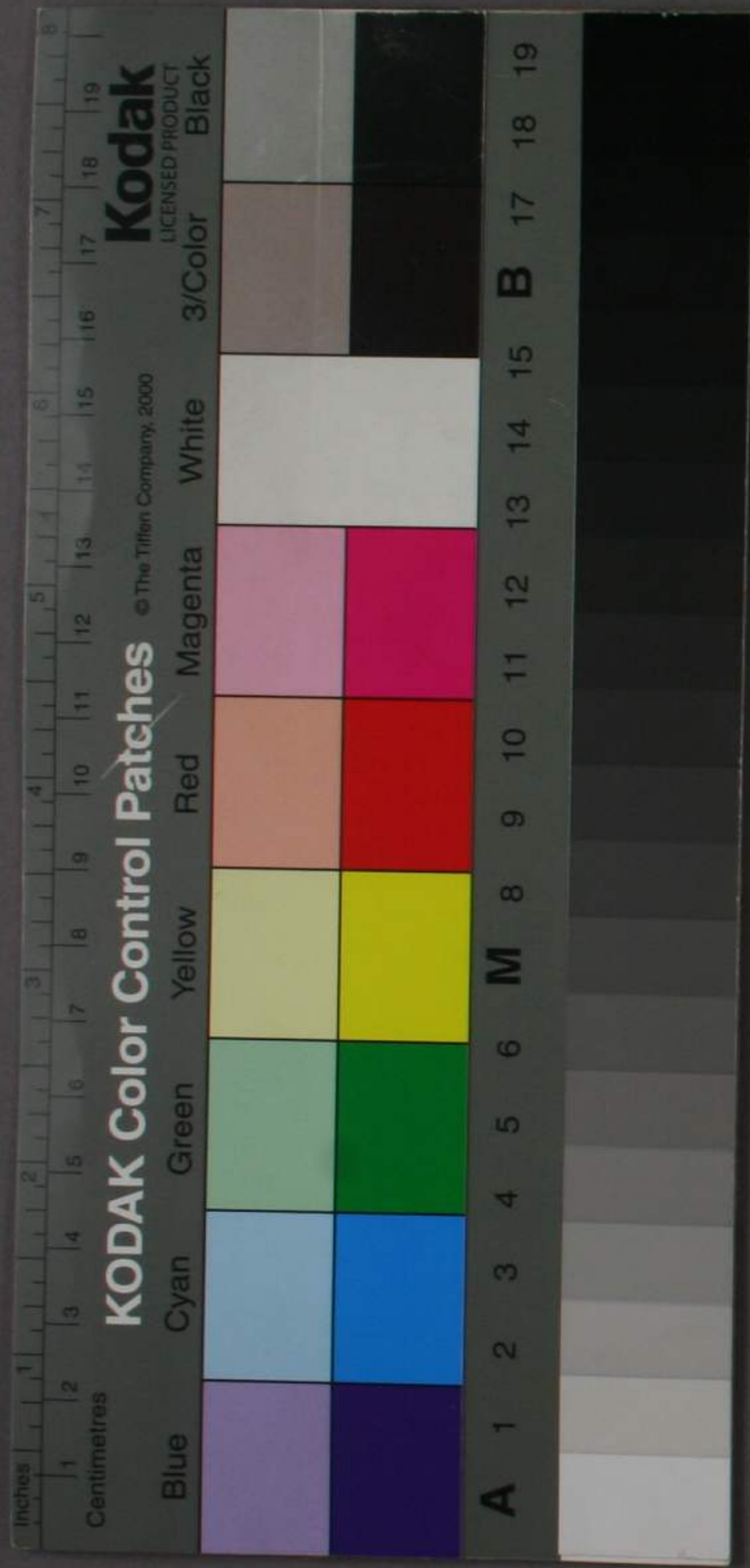
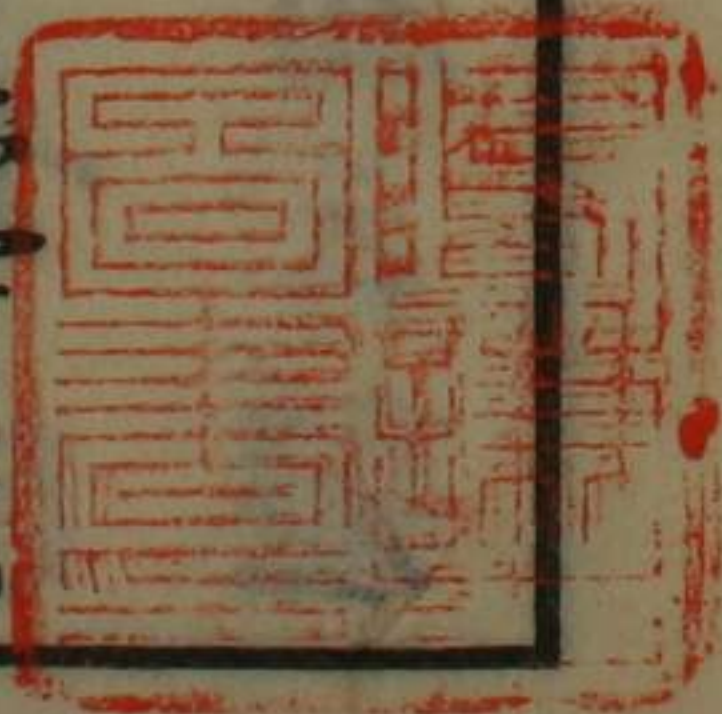




題長崎行役日記首
紀行之史家之一體也。以居其實不
居其為要。否。必觀者何。就。暫。為。益
其人眼界寬闊。冲襟浩穰。得一勝
狀。詳之。則一境界。賦一詩。得五趣。則
一風月。其篇章傳之。足矣。奚必假



楮毫以強緣飾之乎。但恨近世
弄筆舌。記怪志異。多演虛語。稗
說眩曜於覽者耳目。使人忽冰粉
屑。伏焉。豈敢謂之文辭不朽之乎。
今閱此冊之所載。則往年常陸
之海舶。漂流西洋。乃及清國之疆

也。府丞之所聞。雖彼地其處治之復
容易也乎。急諭之朝。譯哲監查既
了。遂照條例。支給錢米。養贍以
待。及月之後。候風便津。發護送瓊
浦矣。於是乃自水府遣官使迎之。隨
引而還。長玄珠者。在叅使中。留滯雖

日淺。自相清宮。風習威儀。衣幘。至他
至。卓子卓然。等瑣事。見閭所達。必丁
寧。國字譯通。不敢滲漏焉。且筑之太宰
府。勢之嚴島。近湖等地勢。陸立水浮
雖卒迫。一縣之方位。遇會心處。賦詩
澄古歌。或自下注脚。正當踪跡之。為再

遊之鑒焉。宜矣。長氏素負蚤譽之名。
深究天衍地輿之度。竟作圖也。縣象著
明。其功實出千古。予雖老矣。今日序
此集。謗于衆。以俾人學術。業已有
醒於天下之眼焉。

文化二年乙丑夏四月穀旦

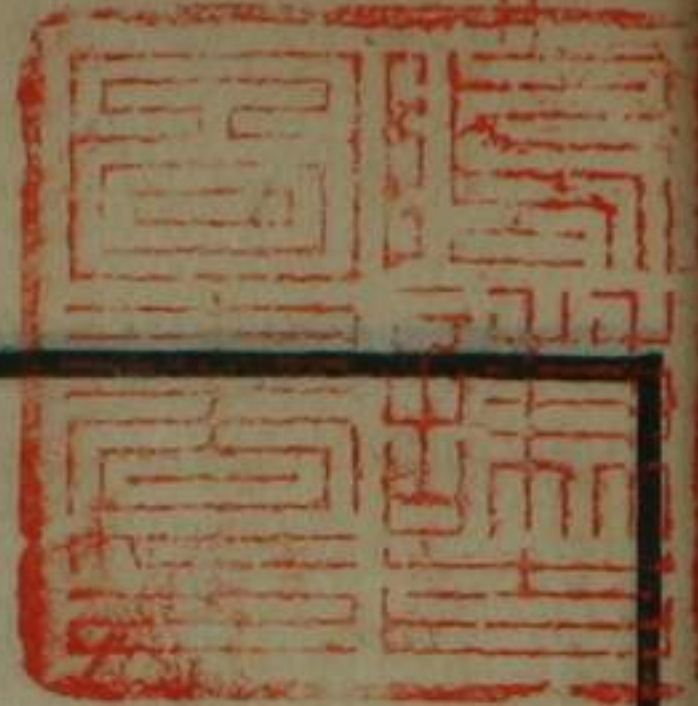
播州奥田元継題於浪

華林古書堂



長崎行役日記

天明和二年乙酉十一月礮原村の廻船、船風不
吹流る、安國は漂着し、是處を月彼ふあ
使船し、長崎まで送り来る、おれに因り、
本藩乃使書^{フナシヤウヤ}書^{シヤウヤ}封^{フナシヤウヤ}封^{シヤウヤ}、予ハ礮原此里^{シヤウヤ}に
代^{フナシヤウヤ}に船^{シヤウヤ}正又市をもち、^{フナシヤウヤ}流^{シヤウヤ}子^{フナシヤウヤ}裕介^{シヤウヤ}に僕^{フナシヤウヤ}と、
郡令^{フナシヤウヤ}此下^{シヤウヤ}知^{フナシヤウヤ}あつて九月廿八日、家を出て水府^{シヤウヤ}に
い^{フナシヤウヤ}る、郡吏^{シヤウヤ}小林^{フナシヤウヤ}半^{シヤウヤ}を^{フナシヤウヤ}清^{シヤウヤ}空^{フナシヤウヤ}田^{シヤウヤ}武^{フナシヤウヤ}を^{シヤウヤ}清^{フナシヤウヤ}なる人^{シヤウヤ}、
い^{フナシヤウヤ}る、後の九月廿日、水府を立、三日の八時、
礮^{フナシヤウヤ}原^{シヤウヤ}乃^{フナシヤウヤ}属^{シヤウヤ}邸^{フナシヤウヤ}に^{シヤウヤ}は^{フナシヤウヤ}く、予^{シヤウヤ}の^{フナシヤウヤ}山^{シヤウヤ}と、^{フナシヤウヤ}去^{シヤウヤ}日^{フナシヤウヤ}所^{シヤウヤ}、大



黒屋長たまつに病、四月八通留して
 五日寅夜刻オメツケカタ監曹より、多羽理をまつ坂地保介
 ちる人郎中乃中めよして行列を揃へ門出を候
 轡ウリモウ二ッ鎗二ッ挾お二ッ、ふふふの二駄、小荷駄二匹上
 下廿一人あり、ていど戸塚ふね家 公事魔路四
 里、我戴さくお入の息に筆さくづもあられハ
 道よりこれ事、細ハ記一證ふふし
 六日、夜沢のおりちし、清浄をもちて、時宗の
 惣おちなり、信おと常に諸国を巡行せし
 と云、小栗判官乃事、いさくの説あれと云

右より
 松より松はく日鬼のりき
 せしけふんくくくくく
 乃後
 ちあけ
 ちあけちあけちあけちあけ
 時より辰の秋の夕くれ

附會より、其実は知くし○馬入川、お後し
 お六甲智れ猿橋より流るる、白旗村より
 神より、金子宮よりいふ、源延尉乃首を切りし
 不、安慶の首塚を、祠の前ふあり
 白旗明神
 飛禽已盡、奈良子不滅、淮陰元帥功、昔日
 更無麟閣賞、孤村空祭、白旗宮
 大磯の驛、松より、安ふんくくくハ大磯の右、秋
 乃くく、此ハ虎澤おれ旧談あり○時宗、夜沢
 を心づき、これより三つあられ、これに能人といふれと

時より一匹の虎をよきと
 て心うきやめのおいかへせん
 今にむも井大堀し難き
 時のふはせいさハ秋もぬ
 ともちれりり時々の沢に
 ちりちりつれて

摘景丹後守殿清菩提所
宗長の事々々宗抵清鳥記
又宗抵をあり一不人様に
若菜川の土大畑の定輪ち

とくちや ぢめ ぢめ の けつ けつ
まにまに ぬる ぬる も う ら ぢめ

うつゝ 壺はわらかけたうき世
うきとあらぬぬのそよもあつ

よきことなれ

[illegible]

たらしめてはやく

桃青号芭蕉庵伊賀上野
人俗名松尾甚之郎季吟
門人也

權現、亥火、生見、尊ヲ祭ル
夫乎宝字年中、万巻上人造立、
其後回祿寸、此條恭時再興、
杜領二百石、

信を以て人の時致とて用事乃
 又人の時致とてふ言疑らくハ
 此宗時宗乃其可んといふ事
 爲福とて有懐念の又山歌（し

いふものなるを、あつちを建て像を安んずし、
けりてそとにありと云、右乃方に留め我の里、中村
とし〇延勾川サカハあり後、冬は上橋よりあり、智恵
ある小瀬子川とあり、げほ小田原よりあり、けり
昔は保家丸居城と、西へ出れば道の尽き、石垣など
豊太閤乃征伐の時向付たりといふ
ヒデヨシ七日長興山海岸あり、縮み森森乃建を前、深井此
岸をとりて湯本村入口の右は早雲寺、北條氏
代の石解あり、横根をふく、大玉の墓といひ、昔
をすくて津島をゆくゝふや、又連袂所字紙も父

龜甲、その身を強くして、
 少一の行も我堂あり、
 ぬき、好事乃もの厚く、
 此の言おにふれり、
 其地の細工多あり、
 牙匠金根山金創院、
 おりたる友切丸、
 太刀、皆鋪く、
 の国此れ文を、
 る人げ、

あはれものなりしをまた
みえんてさうそにすすめ
けふはあはれなる天のぼろ
ふちをけしれはさうな

望山嶽

留士萬葉書不盡或書
不二

字伯正玄珠侄
也代僕從遊

白酒を飲め、店よりて暫く休息に○吾等と
別れて右の方には善徳寺まであり、清敏をいふは
馬を伴ひて大沼阿鼻、いふ所は軍兵水鳥の羽音

一回農桑村の石子杭杭町馬橋
原の墓石

九日、岩手県より右に大内親王あり、其處
 二尾山とて景時父子自宮あり、所石塔有
 之、^{ミヅノ}ミヅノ人見^{ミヅノ}ミヅノ大塔あり十八所、^{ミヅノ}ミヅノミヅノ
 神あり、目今武の事遠あり、^{ミヅノ}ミヅノミヅノ乃^{ミヅノ}ミヅノ
 古河川の社あり、^{ミヅノ}ミヅノミヅノ中^{ミヅノ}ミヅノミヅノ
 新宮とて、^{ミヅノ}ミヅノミヅノ一^{ミヅノ}ミヅノミヅノ
 姫余とて^{ヒメノミヅノ}ミヅノ、^{ミヅノ}ミヅノミヅノ樓^{ミヅノ}ミヅノミヅノ
 山より^{ミヅノ}ミヅノミヅノあり、^{ミヅノ}ミヅノミヅノ
 久能寺と建^{ケン}ミヅノミヅノミヅノミヅノミヅノ
 内より^{ミヅノ}ミヅノミヅノミヅノミヅノミヅノ

山ありて十里程なり、細田村左の山麓より
 天神乃城なる、むー山麓より一帯ありし
 所、山に小笠原山と云○あつた茶屋ハナコヤを
 賣家○明王寺とて日蓮上人乃又ぬきたれき
 山のふりり○岩子村と預知とを放ちて○
 上乃原一言坂皆言戰場なり○又付ハ留とを
 付、ゆゑにけりありといへも富士とて河もあ
 る、在ハ八幡交ハチマタ池田乃宿船場なりと云
 所、右ふりりもなりあり、むー平家盛なりと
 湯谷、高嶺なり○又新川に在る瀬の湖なり

流しあり、この山麓と京との中分とを○
 水田乃右の方小津神あり、弘あり、社領三百石
 神とて、浦五神とて、龍野乃子孫とて、今日ハ
 演雲城下と宿、けり、昔ハ川久と云、城の也、又
 社領神、諏訪の神あり、いほ、まは社領、二百石、
 なり○森坂○やん井一里、此山にむーハ陸地
 ありし、山麓ハ大田、農あり、海とて、今切
 と、ハ、清番所ハ吉田城、主とて、勤王あり、た
 演名の橋あり、有、ハ、むー、さほ、た石、今、ま
 と、あり、高嶺山とて、奇乃、名勝なり、高嶺

山あり、この山麓と京との中分とを○
 水田乃右の方小津神あり、弘あり、社領三百石
 神とて、浦五神とて、龍野乃子孫とて、今日ハ
 演雲城下と宿、けり、昔ハ川久と云、城の也、又
 社領神、諏訪の神あり、いほ、まは社領、二百石、
 なり○森坂○やん井一里、此山にむーハ陸地
 ありし、山麓ハ大田、農あり、海とて、今切
 と、ハ、清番所ハ吉田城、主とて、勤王あり、た
 演名の橋あり、有、ハ、むー、さほ、た石、今、ま
 と、あり、高嶺山とて、奇乃、名勝なり、高嶺

加茂彦助ハ医療多ク其草を
採りて鳥巢道人の飲用
なり是をいふ所なり其田
所ハ彦助和合の所歟と

鳳来山、昔理修仙人来
栖云

古歌

山やこころの山や
はつまつとて

七十五の山は信長記にあり

大樹寺ハ山にあり今ハ松

安流とあり

古歌

長少の山は山は山は

やうの山は山は山は

やうの山は山は山は

一回大庭門

古歌

山は山は山は山は

山は山は山は山は

山は山は山は山は

山は山は山は山は

山は山は山は山は

三奇ノ山也

山に三遠乃りいしとて○白浪歌○石田城
○伊奈村、山に三遠乃りいしとて風狂の男とて
あり、山に三遠乃りいしとて風狂の男とて
あり、山に三遠乃りいしとて風狂の男とて

題加藤山人藥肆

青松落々帶清風地接鳳来仙路通幾歲

主人能賣藥也知市上有壺公

○涉油○十一日赤坂ノ宿、入京、沙門寂照、
俗名大に定基、又とてられ、女之事、とて遁
世、とてられ、昔、山に三遠乃りいしとて

山の所ハ七松平の一長次家、住みなり、石ノ松平
乃御あり○實就るハ二村山ノ山也

神祖重子、此所、山に三遠乃りいしとて、寺、
百ノ石、山に三遠乃りいしとて、寺、

山人の山、山に三遠乃りいしとて、寺、
長、二百ハ、山に三遠乃りいしとて、寺、

山に三遠乃りいしとて、寺、
乃池、山に三遠乃りいしとて、寺、

古き

はるか昔のききえに
しるべきことありけり
いふ

乃里○你見よはく、京橋を下りて新島を渡る
川を九里、七日の行程より大坂へ至るべし、
山崎もこれ程の中なり

十七日乃里、大坂橋の下へ新島に着く、お飲する
むたにこれ等ききえあり、後世にわづらひて今も
のり、舟を乗るゝお船をわけて食事ありと
する所へ長堀富田屋町海をやり、大坂へ代官を
なるといふ者ありて、豊前小倉よりお船を
と、水の上これ程下りて、深き川は、橋を
不自由なりと、長所をやり、理をわづらひて

大坂のいふは、めづるべき寺あり
ふとある

大坂へ下りて、いふは、めづるべき寺あり
ふとある

大坂へ下りて、いふは、めづるべき寺あり
ふとある

ふと小倉へ帰ると、唐土へ行く、
大坂へ下りて、いふは、めづるべき寺あり
ふとある

過大坂城有感

江上巍々大坂城、依稀秦主樹功名、感陽

ありて此に渡りて北風来りてと面白くわづらふ今
 月にも行人も○和久鼻より十日又丁川ふぬ上
 流崎より五面霞漢ありとて詣ふ
 廿四日西風強くわづらふ逢ふ寒く日さす
 廿五日快晴ありとて止次、舟停めさるゝ
 片崎より西宮へ系詣ふけ不き煙思ふたの村
 天れ磐石補ふよきそく流るゝふと云、和
 久の鼻より捷徑をわけし四十町半と云ふ、舟
 渡りてつらり、歸るふ八尾崎より川舟をね
 ふ入て和久の鼻より着く

廿六日明きり傳法小漕ゆ、和風を帆を揚ぎてよ
 海面よりと云ふ、漸く日出て四方明あれハ、舟を
 甲山武蔵六甲、摩耶山と云ふ、和久の鼻より
 みきき須戸の海、舟の煙風よりいへ東南
 より大和河内れ諸山、泉谷佐野舟和国紀を
 加田桑崎の海岸より南より台地あり、通門
 たりけ、近く見ゆ、しづふ人渡りて法橋乃
 磯松尾崎西南に横るゝ、舟よりとらふなれ
 舟は左右遠近より大小舟船數十艘風帆飄々
 たりと云ふをわづらふ漕つらぬ、船は和久鼻より

山名録

南にあつて八雲嶽、八島山、旁と帯く、オスナ
うめ五六里もあつたし

八嶋覧言

壽永南巡日海山入戦圖、英雄太不返、千

歳暮雲孤

右は八京上鴈崎左に縄島といふ湯く、
志保系なり、日暮く、海あり、日比く、
うり三十一里、橋戸灘とて波たし、
すこし、海あり、八島く、
すこし、海あり、八島く、
すこし、海あり、八島く、

廿八日

廿九日、湯あり、陸へ、
備前、
人形、
城、
つ、
遠、

大町行状日記

二

實本武藏惣領の人なりと
稱とそより伊瀨ハ武藏々
よりて小倉候より

六日辰刻より浦中へ仲よくおき、大風吹来り
防波とす。四時を過く、船中より先きの田浦より
望む五つとより押出、左に豊前右に長門
相距^{サレ}と僅よみ、六所たの海はふ早戸哉^{ハヤトネ}鳴神
なり、毎年十二月三十日秋分、旅人海中より和^{ワカ}
布を刈ゆ忽ちうり此船より一里なりて
石を下り関なり、前より龍崎なり、自今倉
俣北土官本伊織、長門佐々木佐々木定政兩雄

武藏云々^{アライ}月い依く本、穀^{アシキウ}より不左内裏や
いふ昔平取らの事を何官とす、その和久
島あり、鴻れ也乃石の上と次を流す、老花石碑
有、ひー豊太谷知龍陣のと記、所を流れる
河船、海^{ヒテヨシ}よりあり、玄倉よりとし、新船に次を流
自宮より知と云、新れり母小倉ふはく○十月七日
あねより上候、おとあお小倉城より小倉五原侯より万
石、城ハ海岸より、城樓より大町にて殿守とて調
へし、橋の通る所、河堤又舊々敷きなり、新小
入く者人々と、古屋の毛織、常、袴地ふ、袴等

長山有石曰言

題子家蟹

遺平氏名

すき^ギ本^{コヤ}をの^ノ海^{ウミ}を昼食もふの^ハ是乃^{ナニ}留^{トモ}り貴^キ
櫃^{イハ}あり、漆^シく、似^ニく、お茶^{チャ}来^キて、突^ツと、端^ヘな^ナふ、不^フ

とぬ 臭なり

能方村より多賀野村社領百石大村より、河と
双林院より福正侯乃普掟所より、中ノ下黒田

言

家定公乃齋醮乞之飯塚亦宿焉

八日雨、冷水、涼、越、風、急、人、夢、

苦止山家録ヤマイ一ヒルメシ 里人お伊達守初

法海

吉子

雲ハヒ之秋ハ木枯ル電ハ

1892

蒼家

五ノ下ハ多シク改テ

うめのむすしあひをふ

ふふふ

梅と文と云ふ人かきよ

井に何とて
招くは来りて

芳林折梅人の憂ふ

卷

たゞけりて人はいふ

やれあゝいふは極に
きねを

明薩天錫天滿宮詩無常

說法現神通千里飛梅一夜

松高亭夢醒雲吐月觀音寺

裡一聲鐘

明洪序詩
日本曾聞北野

君愛梅清洒又能安謫居西

府三千黑一夜飛香渡海雲

延喜三年二月二十五日右大臣

薨于配所葬于安樂寺

乃法花堂、品少堂、浮殿、中門、回廊、本社、神
樂堂、鐘樓多あり、後より數角の東に松あり、
社乃前庭に飛梅存して秋に松はヤナヒ楓を以てカキ
なり、法華堂より下りてせうきふなる遊亭といふ
飛梅と云ふお人ほらんとするや池邊に心れ
字はカメノ象ありとくみしるふの橋をわたり、池
邊に石楠数株あるを中よりさかすまゝ大木
あり、橋より天皇宮にあると見えたる、池中は鴈、
フシトリ鶺鴒、鴨を養ひ鯉、鮒、游魚も人の望みとし
つゝなり、社地を即古乃安樂寺とて正徳十九

山行名目言

年ぬ原仲文建立、今れ京師より八首の謠を
と代に延喜王院と号し神宮寺を稱せり、
此禮を二月ともせり、よき計なり、
梅の守はるめの候上經文を平うる也、
郭なるゆゑふ人をも尊信す、六文の目く是を
多ふ、おもそむ教ある人を連するれ念を具内て
非くと對めなほ安可、韻ハ金又兩又十歌之ニ、
韻ハ分たると、別爲社僧會を奉りて懷念哉
さうめ神前にもま納し施主も是は是かた
からこれらとて、六月七日かきに乃連寄あり

いふはふに思ひの事
 仍て言ふの事あり今ま
 夕々しくは
 乃運歌なりて思ふことれし

其子所立之は是賢あり

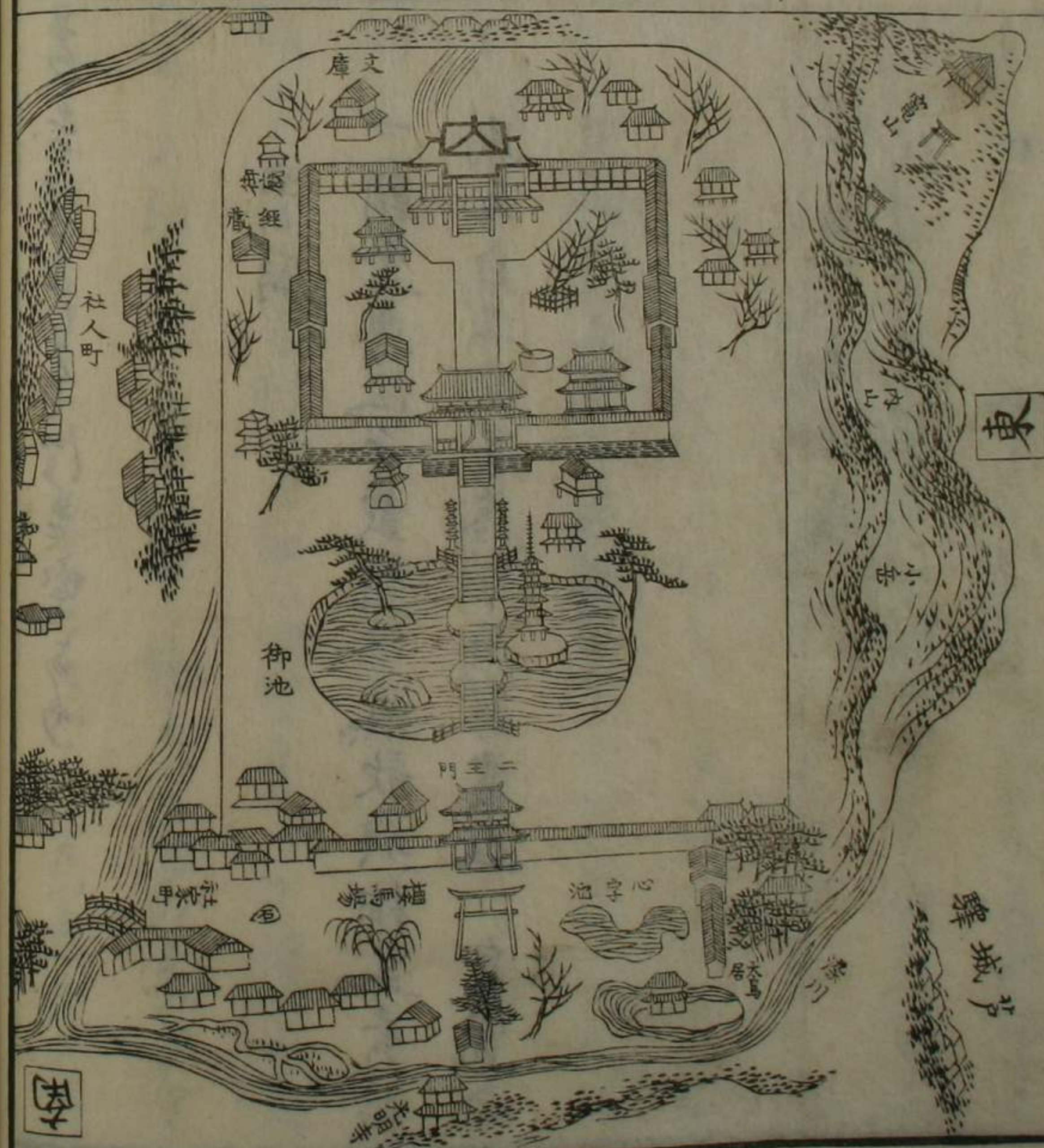
菅廟

一朝登鼎位，千載起儒風。
歌與柿山秀，詩同元白工。
台星落宰府，霹靂感皇宮。
今日廟堂上，瑞雲自鬱葱。

寧府天潢宮圖

長山行記

丘より八日あるは
 外殿より山味酒の要
 行といふ人よりさういふ
 友系仲平これと飯宮に
 けり居社地と定むと處ふ
 必後心守れといふの
 天馬又と殿号とさういふ
 らる。後堀門渡の流竹
 世の縁甚重なりといふ人
 物とさういふ西府より社
 殿とほどもあるはさういふ
 後堀門とく信貞とつり
 子成信丹とさういふ人
 小とあるはさういふ人
 是らに今にさういふ



長山行記



各三十
又石宛

長山抄言

聖王親見四王

今此中祠の如く築也

菅家詩

都府樓煥者瓦色觀音寺

裡只聞鐘声

一云鐘字作唯瓦字作月

一曰天判山山中有天拜岩

菅公新天處地喜二年事也

も是も本姓を菅原氏としかば禮の事成りぬ其ふ
ちれ生王を安性院とて禮せ七坊ありて是を
福ふのみ小姓とて礼旅一所とて礼禮の時結興
ふにふは、やうー禮禮の供ありて是は思ひ
人の禮とて云、菅原氏此にふは内山村の村の村
とて今、禮とて云、菅原氏より一里半東の村
あり、觀音寺、戒壇院、国分寺、菅原氏の村の内
に在、都府樓乃迹大門乃礎位六尺觀音寺の
西とて云、觀音寺ありて、菅原氏、西、觀音
とて今、湖、内山とて、菅原氏より一里半あり

大なる山ありて山の麓にふは、菅原氏より
す、菅原氏を見ゆ、山中に瀑布ありて菅原氏の
跡にふは、菅原氏、道、菅原氏、
と、菅原氏、馬、菅原氏、二月市、菅原氏、
代、菅原氏、夜半

九日、神、菅原氏、
候、二十、菅原氏、
と、菅原氏、
ふ、菅原氏、
東南、柳川のふ、と、久、菅原氏、

言ふ
川を右にふりて
せしほしといふのうら

川上、山、少阿弥、夜、蛇、おれ、さ、蛇、山、お、は、う、れ、と、
其、日、八、お、う、り、雪、す、う、う、て、風、を、し、牛、漢、
る、ぞ、れ、

十日、あ、の、さ、海、傍、の、山、西、う、山、蛇、子、あ、る、海、傍、を、
昼、暇、を、過、さ、る、山、白、田、う、う、く、横、綱、茶、梅、を、さ、う、
ん、く、う、皆、を、お、り、う、実、を、地、を、と、う、い、ふ、と、
小、橋、と、う、蛇、壁、を、あ、る、温、め、あ、り、
十一日、この、海、村、北、横、ふ、十、国、余、の、捕、を、さ、う、中、一、袋、
大、お、う、圓、を、お、う、を、温、め、さ、う、り、時、は、う、お、り、七、
里、舟、を、お、り、ふ、る、蛇、を、お、り、う、い、う、い、う、海、に、

一作
蛇、
蛇、
蛇、

う、う、大、村、を、十、里、余、れ、入、海、通、門、ハ、僅、ふ、二、丁、
あ、く、温、め、乃、早、海、河、使、の、う、う、う、い、う、と、
乃、通、門、を、お、り、お、り、海、傍、奥、を、お、り、う、お、り、
長、く、一、町、を、お、り、う、海、傍、の、う、う、う、お、り、
う、う、蛇、を、お、り、中、に、も、黒、を、お、り、う、蛇、を、お、り、
蛇、を、お、り、う、人、を、お、り、入、れ、う、お、り、蛇、を、お、り、
う、う、う、乃、お、り、う、う、う、う、う、う、う、
う、う、一、尺、を、お、り、う、う、う、う、う、う、
う、う、う、海、を、お、り、う、

十二日、お、り、う、う、う、う、う、う、う、う、
サ、カ、ヤ、キ、
う、う、う、う、う、う、う、う、

卷之四

長尾乃乙未年六月

チヤウワウ
セム
モテナレ
リヤナリ

シヤウカイ
トリツキ

此のきくは、
一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、

十四日申刻而雨。秋毫乃止。女輩內有爲之

摩多利
 刺^{セツ}等^{カン}乃^ノとさ
 旗^{ハタ}姫^{ハシラ}あり
 今^{イマ}くふ^カ時^{トキ}を

長山石經

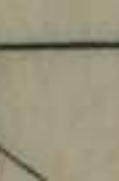
筆者リユートルフロイトニ
圖像



○升浮園よりみき尺六寸の木の中よりぬき中へ硝子の筒をいれ内へ金粉をいれよくまぜておきおそくに焼くべし一冊焼くとよくその硝子に硝子をはりておき

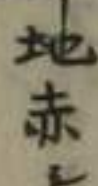
中へ所を量^{ハカ}る時斗^{ハカリ}たるとして、
 箇二内へあるいそ板^{イソ}に法をて解^{トク}は掛^ケ
 其板又文字ありとも書^{ハシ}はすもあふれ
 難し、業人はあつて思^{おも}ひよのむ乃西を頼^{たの}
 のごとく教^{おし}えなく拭^{ぬぐ}きとて、畫面^エの袖子^{スベテ}を張^は
 きしと透徹^{スキトホ}なり見ゆ、因^メ于此^{ココ}に厳^{カサリ}なる
 美麗^{ミレイ}なるを、畫き山水人物といふは、あま
 常細密^{サイミツ}なり、倉卒^{ソウソツ}に見わづかぬといふは、
 大鏡^{ダイキョウ}を祈^{いの}くにけなく、人々をいふは、あま
 座中人^{ザチジン}があらはら堂上^{ドウジョウ}とあつて、玲瓏^{レイロウ}たる

序をあるくく樓上よりその方々にて書を敷
 中央に几案を置きけフランスの酒を飲ぶ
 らぬに、皆在座ありといふ、酒を揮き中
 龍吟吟と音楽あり、高き舞臺より歌あり
 みる、側目交椅あり、椅子、和紙と筆者を
 手にし、手紙をよみ、その年有リユウトル
 フロイトンといふものあり、客は、長
 通事人数多き、酒あり、中にも西人あり
 酒あり、言語あり、彼等も、其の代
 して、手紙をよみ、交椅あり、手紙あり、手紙あり

おとし、筆を看即ち筆を肥て蕭々として八分書き
文に此紙を雲と画くは、たの方より記帳
て右のかゝ横りをして、通事人の譯文をこれに
何れかといふことを、紙に方れなすは、
筆ハ石筆乃とももの羽筆乃これ故を尖
而又刻目有て是けをぬくや、紅毛も移る候
就菓子と稱し茶とすじ、又葡萄酒
ア子ニ酒 味甘辛 砂金入 フソウ口酒 香ハ力チシレ
實、生薑、肉桂、豆、フラスコ内注子硝子の瓶
 といふ蓋あり酒を下し也。香につけて

て其のよしを切るとは

クロンボウ



カク赤

荒蕪如もろく帯れ人より
鼻低し

厨下タイトコロに外達ソチを置きて、高圍ケモノヤをしてハ取置み足。
牛十七八から取り出し、牛ハ四方の牛より小さくし、
角短く耳大く形とす。しきりコト、時珍の「前渭稷年」
なるべし。げんれ牛より大なるものは、うらぶとて人
道ドシヤウタに回さず、一頭カヒ放し牧置といふ。

邦人乃姓名通事人の語を記し、船頭を
 カビタンと云第か舟をとモトリ、日雇匠とテンシヤ、粉
 理匠をコンハンヤ、料理人をクロス、日雇をニタロスと云
 一カビタン名をヤンガラス年三十四

一カビタン
名々ヤンガラス年三十四

一回ヘトリ名ハア、テレヤアハストウチアル年と拾

一己年より在留乃筆者名ハヒイトルコストル年四二
一為年渡り^{トモトリ}筆者名ハリユウトルフコイトニシハニナセ

ヘンスレキコユルコツフ 年ニナセ

ヤンテンキケエルリキいニサぬ

一四
ヒイトルヘイストルヘイト ハニナ

一區
レンケルヘルトストサアカ
ハニナ四

一七 多 在 留 此 上 外 療
ヒ リ ツ フ リ レ ウ ナ ア ル ト
ハ ト ナ セ

二 齒 痛 下 外 療 ヤ ン フ ラ ン ス テ ホ ウ ト ハ ニ ナ セ

一をよりおさめるのたはまへルメヤンスワルランヘン　ハワセ

一箇年々を在心の太ユ ヨウハケレステヤシシキ 年ニナシ

馬月之江戸事、三月朔日、湯田之元所

紅毛館

王制從來柔遠民紅毛委質在瓊津五風
十雨西洋外勿道東方無聖人

卷之四

[illegible]

何れも此の如くして、何れも漢の六韜（シンテウ）の如く、公卿大
 史よりなるを、天子に用ひければ、

游撲菴



委奇于足日已

龔廷賢

面色赭薄

便服



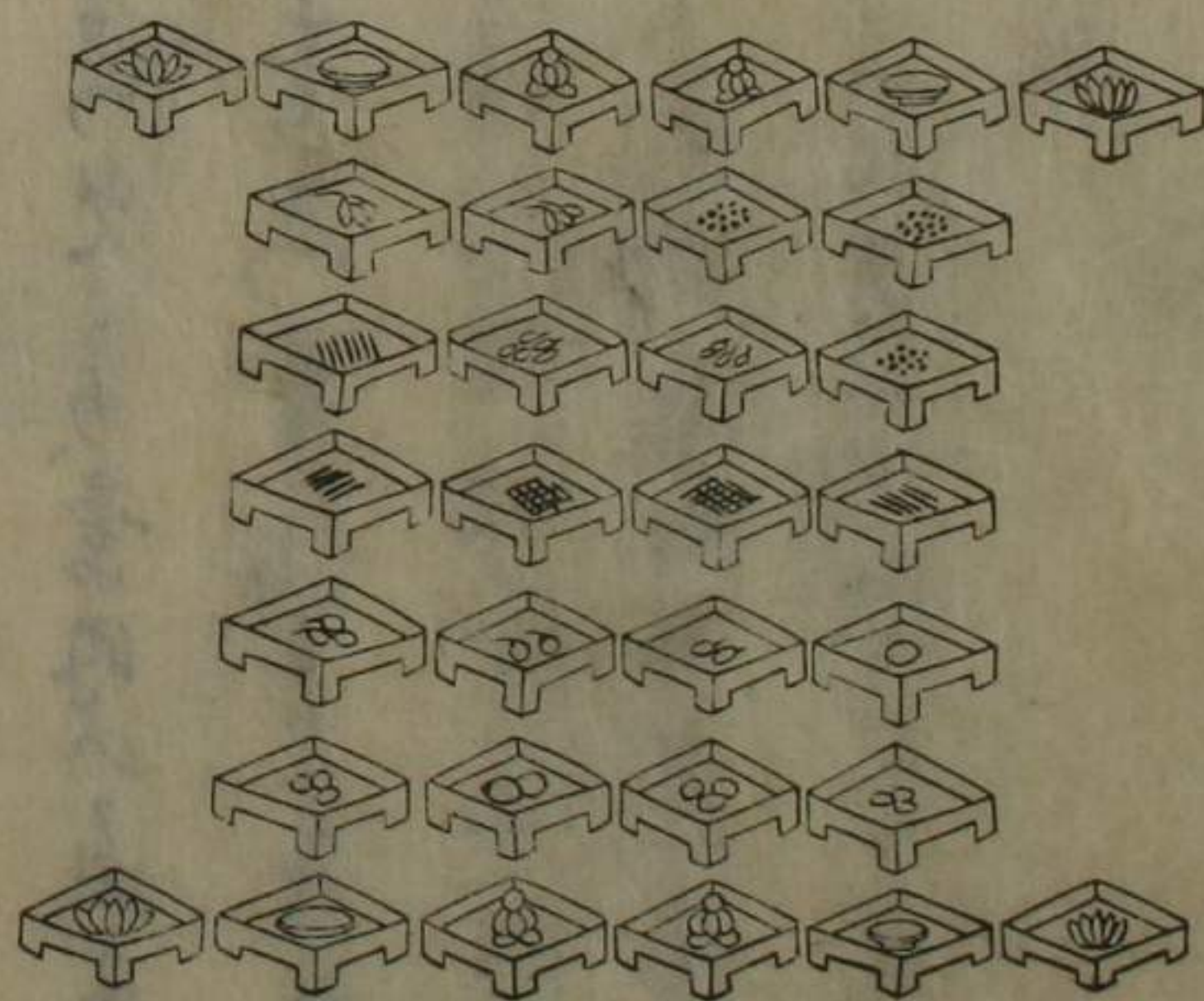
鼠辯

摺扇
摺疊扇
撒扇

襪子
皮鞋

三行くゝみそ面歌中門をさへて去秋ををれし
 ありし厨下乃口の後より清きとのりし樓より
 唐人うらやましくもぞろぞろと見ゆす、やまふ人
 も種とくしつゝえり、常肉の通事人高尾に
 たつものふきたる華装して唐人をわらふ、
 若くは瀟々として、あはれつゝ漢語をい
 陽気かステラ、芳助枝、就服肉おれ果子をきく、
 してすねらと座敷の中央よりなつて、彼等の
 風とみえり

唐人至此餘仁君我亦君貴之謂以
游懷施

[illegible]

清客館

聞說單于稱帝王、年々鼠薊至、
崎陽當時、文物何須問、可歎衣冠非漢唐。

まゝあり海客ふかく唐船をこゝへ一艘ハ氷の中央
 ふあり、一艘とテ操ち北岸へはあく、福あ乃一箇
 船長と二丁五間、横五間、帆柱三丁又間、由り四間
 袖に二枚ふの形を画す、^{トモ}艦小竇徳乃二字を
 宝字又星上と鳥と人と雲と成るぐ、おえん
 色瀝青有座あり、帆ハ每帆とて六乃ありとるは能ふ

福海船體の方より
斜下より照

長廿三丁五万は、又留るゑハ
 ちやん落るゑ水はくぬき石
 原盤より人敷六十人より半
 人まで、枕人等枕として用
 花のよき枕より二敷金にてん
 玉毎の玉をとり、形原風の枕
 にせり、みきぬけとて、枕箱ハ
 贈此はふりやう

南京、福別此船、年々十六艘、入津を許さず。
是と爲す如く、その方乃て二百石積の船、其艘
げとふ積、正は船を唯一艘、ふくむ事あると云。
船と云へる如く、
ハレコ
船と云へる如く、
あつてくたあす



十月廿六日
大倉屋
此間人々
梅所
江口
深氣
昔年
入

頃、オヤヂ父を失ふと、オヤヂ父の如く流人衆

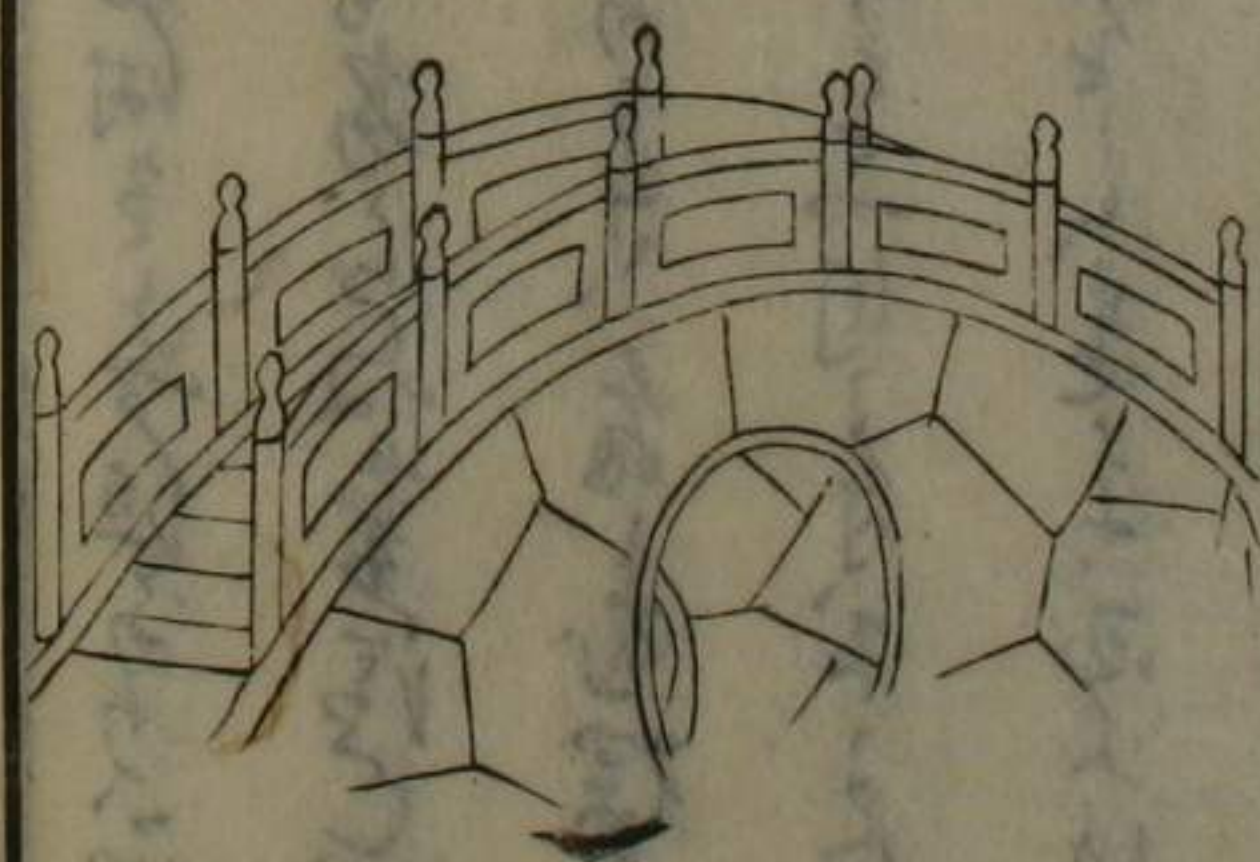
[illegible]

文奇行展相記

招きく位にあり、其の時多し位なり、正徳寺も
唐土の寺なり、三つとも芳らぬ香煙を、祇園社、
清水寺、石山寺より作りて、香煙標す皆えて、
馳せりたりと云ふ長崎中を一國とし、下へ揚子河
有、丸山といふ名乃娼家をもし、是より西へ行くと
泊れある所、その海は六所乃石火屋甚て銀葉の
所と云ふありて行くとこれ風雨俄又強く舟
渡り難しとて中途より降りね、あつても船中にも
請寸、中門乃虎トビノ大学の經一巻を乞く、華人の心
之、聖像十哲乃像並に文字帳をもた、左流寮に

唐今改所と題橋と、此ハ唐船より買上乃書橋
 久れよりその吟嘯し公儀清用れ分ハ釋取、安
 之清合乃丸れを入れとて、又うやうやな、
 書物藏とて、文庫とあり、証訪明神大社とて、
 乃石垣より大なり、ありと、長閑ハ石自由の處
 石橋、石垣、大鼓橋、
 目遠橋有

大鼓橋



眼鏡橋



と外より石垣石橋とて、城壁のよう、
 此より移る事、
 之より、
 之より、

つるはしに菊並に
ナニサムラ

連城鏡

○紅毛船長崎へ往來乃船費を減ふに便

成林と西川氏の云ふやうに
乃不^ハて人の國と云ふ事
を本^ハ元^ハてハ百^ハと云ふ
と云ふ事^ハあ^ハる^ハに
す^ハし^ハ和^ハれ^ハり^ハす^ハる^ハし^ハ今^ハ我^ハ邦^ハ
と云ふ事^ハあ^ハる^ハに^ハ七^ハ人^ハを^ハ居^ハり^ハ
利^ハを^ハな^ハす^ハる^ハ事^ハと^ハ云^ハふ^ハ事^ハと^ハ
事^ハと^ハ云^ハふ^ハ事^ハと^ハ云^ハふ^ハ事^ハと^ハ
と云ふ事^ハあ^ハる^ハに^ハい^ハふ^ハ事^ハと^ハ

わ^ハる^ハに阿^ハ美^ハ院^ハ乃^ハ本^ハ國^ハハ^ハ長^ハ崎^ハと^ハ云^ハふ^ハ事^ハと^ハ
千里^ハ乃^ハと^ハ云^ハふ^ハ事^ハと^ハ云^ハふ^ハ事^ハと^ハ
ふ^ハる^ハに^ハ國^ハと^ハ云^ハふ^ハ事^ハと^ハ云^ハふ^ハ事^ハと^ハ
白^ハく^ハし^ハて^ハ長^ハ乃^ハと^ハ云^ハふ^ハ事^ハと^ハ
世界^ハを^ハ巡^ハ行^ハし^ハて^ハ交^ハ易^ハと^ハ云^ハふ^ハ事^ハと^ハ
け^ハる^ハに^ハ大^ハ國^ハと^ハ云^ハふ^ハ事^ハと^ハ云^ハふ^ハ事^ハと^ハ
屬^ハ國^ハと^ハ云^ハふ^ハ事^ハと^ハ云^ハふ^ハ事^ハと^ハ
と云ふ事^ハあ^ハる^ハに^ハ長^ハ崎^ハと^ハ云^ハふ^ハ事^ハと^ハ
百里^ハ乃^ハと^ハ云^ハふ^ハ事^ハと^ハ云^ハふ^ハ事^ハと^ハ
と云ふ事^ハあ^ハる^ハに^ハ世^ハ羅^ハと^ハ云^ハふ^ハ事^ハと^ハ

河内氏曰紅毛の石火矢と
二月月五日の修く三井同
也なり

い^ハ代^ハ官^ハと^ハ云^ハふ^ハ事^ハと^ハ云^ハふ^ハ事^ハと^ハ
の^ハ咬^ハ啗^ハと^ハ云^ハふ^ハ事^ハと^ハ云^ハふ^ハ事^ハと^ハ
く^ハ齧^ハす^ハと^ハ云^ハふ^ハ事^ハと^ハ云^ハふ^ハ事^ハと^ハ
は^ハし^ハて^ハと^ハ云^ハふ^ハ事^ハと^ハ云^ハふ^ハ事^ハと^ハ
い^ハふ^ハ事^ハと^ハ云^ハふ^ハ事^ハと^ハ云^ハふ^ハ事^ハと^ハ
の^ハ長^ハと^ハ云^ハふ^ハ事^ハと^ハ云^ハふ^ハ事^ハと^ハ
帆^ハ柱^ハと^ハ云^ハふ^ハ事^ハと^ハ云^ハふ^ハ事^ハと^ハ
年^ハと^ハ云^ハふ^ハ事^ハと^ハ云^ハふ^ハ事^ハと^ハ
條^ハと^ハ云^ハふ^ハ事^ハと^ハ云^ハふ^ハ事^ハと^ハ
石^ハ火^ハ矢^ハの^ハ宣^ハと^ハ云^ハふ^ハ事^ハと^ハ

長崎石火文のふりそめ
ちんちん。軍用部員に
活入。そめ。そめ。
石火文。今。八。公。司。に。外。務。
そめ。そめ。そめ。

くおしよきく川舟にわたせ出入りておつ
より海にわたるに二百里なり候おはつた時
は海中地震なりと云へばはるもなり
くするなりえ来紅毛ハ悪黨にて海賊し、船を
必とハおしりて新紅毛と云ふ所までけりしに御
沖船れくお毛船出入りときハ高島の前候也
お毛船あきれて二ヶ條とて漢也と警固あり
陽帆といつと九月廿日午日ハ高島候矢方の歌と
お毛船ハ家老ハ二三日おしりて沖の暗水遠
見おしり九十里候 望遠鏡にて帆影見えすと

江をたぎて帰城す、佐々乃家老八海蔵
 黒田氏、福島の事をいふに、
 是れ方にも用心よかき事、七ヶ文の石火矢
 巻、船中大津戸にあるハ石壁の高さ八九尺上
 又銃二挺あり、同徑之足許、堅銅俵五、漆塗
 横よりある所、形は筒状此穴の徑少一尺又いふ、堀
 堀六尺入此岸城まで十丈城裏へ向、石丸八番
 ありて小豆八平此市をこといふ、櫓臺ありて掛
 り、けり大矢と云ふ時ハ之に當めて長崎中島
 鍋奉行も掛け人死せしなり、國崩とも云ふ、其人

乃後をとるひいどさう遊みあはる事ハな
れども人乃砲石^{イシヒヤ}をくまふ事あつたとい
況それより十倍それハ更にさうなり

○秋松乃^ノ名姓ハ飯沼ハ幡伊勢、蛇家、天神
若秋、福之、あつたといふ事九月九日詔此
事禮大會、事十一所よりしてあつたといふ
事所ハ十所よりして七年四月よりして丸石町、人
町、毎年おはる事、あつたといふ事然らば
事なり、種々此節もれを事よりしてあつたといふ事
陀^{ヲトリ}文やても、人ハあつたといふ事、^{キョクハ}て

事ハ乃ともりも、唐や紅毛あつたといふ事、^{キョクハ}人
を一人とせ、馬も、人ハあつたといふ事、馬乃中
より出た、やけり日本あつたといふ事、^{キョクハ}人
困人あつたといふ事、^{キョクハ}人
後、あつたといふ事、^{キョクハ}人
後、あつたといふ事、^{キョクハ}人
町中此事、^{キョクハ}人

○長崎土産品物

- 眼鏡 蛸子 時計 天文道具 赤布
- 彫刻 唐金道具 花毛氈 蒙眼

錫 漆物座 漆唐紙 花多拭 飯唐紙
 造总 線香 根本多指一宿 後洋の果 珠数 如木
 安睡足袋 玉細工 土筵 造册珠
 外藥道具一式 唐船細工 鐵
 石橋石工 唐様 鬘紙 綿子弦 煙草
 南瓜 西瓜 八升豆 陽元豆より ジャボ
 密料大石信 赤サテ 琉球サテ 唐菓子
 類 黄糸 香餅 ヒョウ 胡麻餅 沙糖 白黒水
 烏羅保衣 番沙糖 大繩銀 玉
 糕 牛皮 頭良餅頭

○南蛮菓子

ハルテケシヤアト カステラボウル 花ボウル
 コンヘイト アルヘルカルメル ヲヘリヤス ハア
 ハアスリヒレウス ヲブドウス ターコソウメン
 ヒスカウト ハン 衣の外 ねん板 拳 走 へう け

長崎

瓊海通夷夏百年佳氣開 客重譯語至 船
 載貨財来 土俗皆華麗 士人多俊才 可憐
 山水美 採筆暫徘徊

丁七日寅刻長崎を出 五日見 崎と 磯と 大石

名を忘れぬ本、諸韻、カキ聯珠イタダ、いふか八郎非あゝハ
 隨元、来菴、法雲、乃等なり。就中西門北頭ハ第一
 関、三門乃能き廣壽と即ち福聚禪寺に於ての堂に
 文字活動するところ、志すべし九時と漱して立つ
 逆縁は歸せられし。じ又善王を廻ハ細川家の長
 ありとて、此を云旨乃至此の經冊并、大友義統
 此中娘共外京朝堂上方れを紙、是亦礼力畫圖
 等種々の珍物と都しみせたり。予う詩を乞はれ
 より寧ろ府の茶席の詩を乞はれり。其ときある也。
 今や翌日小酒く所乃を智おとして、ケルハ唐一紙色紙

十枚なり、堆朱のすゝと朱は唐紙墨とを載て
 是より詩をすられと云、予りやより書に授し、
 やしと云えは中々其の詩ハ多乃詩う能く
 是より予て其を寒く、すゝに朱ぬる及て其の
 ような流しれを就又紙中の食用とて其の一を
 贈つと云ふなり、三有贈とて小倉の物なり、
 一有男ありと云なり、女四日五日を一日とて
 清りて、日暮り清りて、長流のすゝと云なり、
 と云ふの初に下れ関と云く
 廿七日遂に舟より下り、弦へより下り、龜山に據

一有流を、洞壺海眼にのりみたり、るる風景
 あり、是より後より下りて、三河所よれ方に河津
 あり、ち僧あり、東門より、安徳寺に、陵のふり、
 有る寺に、本像を安置し、其の隣に二位尼
 内侍及び平家一族を像と画く、古法眼元佐乃
 筆に、次の廣庵の面、望紙、金張、附平家一族、
 其を裏合、就れ、始終と云ふ、公佐光信の筆に、
 後れ、山岸より、檀乃浦へ、舟の人々、れ、石塔あり、予
 其より、く、一付と作る

謁

長崎行御記

長崎行御記

[illegible]

鄭衛 テイ エイ

其一

長奇于晏曰已

是避秦人

其二

仙女顏如玉，合歡盃幾傾。
可憐琴與瑟，猶有鳳凰聲。

其三

美人長袖動，並立玉欄干。
為舞霓裳曲，忽疑到廣寒。

其四

銀燭瓊筵上，青精與玉漿。
樂哉仙窟趣，亦自似劉郎。

其五

燈背金屏暗，香熏錦褥開。
陽臺雲雨夢，忽向枕頭來。

里人乃相之，乃小姑之使來聘之時，人亦
之，乃不順之，亦小姑之使來聘之時，人亦
之，乃不順之，亦小姑之使來聘之時，人亦
之，乃不順之，亦小姑之使來聘之時，人亦
之，乃不順之，亦小姑之使來聘之時，人亦
之，乃不順之，亦小姑之使來聘之時，人亦
之，乃不順之，亦小姑之使來聘之時，人亦
之，乃不順之，亦小姑之使來聘之時，人亦
之，乃不順之，亦小姑之使來聘之時，人亦
之，乃不順之，亦小姑之使來聘之時，人亦

はるく又日敷八日通ると、是より海人共よりて
安南記二巻并親流海上番を伴ふ

十一月四日又つ時、^{トモツナ}船を起て北風はるく舟飛

のゆく度防北室積を左よりて上の嶽へ成り

是より舟、船又番おほくあり

又日又つ時、船は浦中、深五里ありて大島あり

と云ふに、船は舟を、舟の所左より方ハ岩國を海

岸横へ、道通るよりて見へ次

六日又風ありて、舟は浦中、深五里ありて大島あり

斗嶽より大河のほとり、舟は浦中、深五里ありて大島あり

古すに

舟は浦中、深五里ありて大島あり

はるく又日敷八日通ると、是より海人共よりて

安南記二巻并親流海上番を伴ふ

十一月四日又つ時、^{トモツナ}船を起て北風はるく舟飛

のゆく度防北室積を左よりて上の嶽へ成り

是より舟、船又番おほくあり

又日又つ時、船は浦中、深五里ありて大島あり

と云ふに、船は舟を、舟の所左より方ハ岩國を海

岸横へ、道通るよりて見へ次

六日又風ありて、舟は浦中、深五里ありて大島あり

斗嶽より大河のほとり、舟は浦中、深五里ありて大島あり

嚴嶋祠

島山秀色鬱崔嵬、先見海門華表開。十二

樓臺浮水面忽疑夢竭城中來



多岐大権をて造る、高き又餘表此歌ハ附書と
 巖山の大明神と云平相國乃高也、裏に頼を付於
 貴人天の神と云書なり、小聖道風なりといふも
 名々^コ知^カ難^ガあはに信し、高きハ市松姫命
 として權友天皇の御女現ゆゑ元ハ市松姫と
 いふも、其好佛家皇女し辨天此處を稱し明
 神の清君ハある人もれし、本姓ハ西向國府王に

ふもふとぬのやとけくすよ
なめりてけしん菴のうらみ

九日忠の海子臨み所北望とあるなる切なるはあり

津内乃留船百艘何るを朽し合ふに出入遊女

まゝに
いふ
き
所
あり

十日あがと此迫に成るたの岩壁のふち隈をおお

錦より海にわたりて都下を去る海を越えて並河

修業已了處之端也

屈曲し面白し竹辺ハ磯の家整とて名物也酒飯

乃輒の浦たふらう家瓦屋白壁、ちちく奥に

五ノ順風王ノ船走ル膝息ノ胃江行ニ目也

海を乃月比は海に、恵の海より二十三里ありとも

ナニナ

はのちれきちちとにや
ゆふまのちちやゆふま
つゆふまのちのちのち
ゆふまのちのちのち
なほふまのちのちのち
なほふまのちのちのち

舟に碇ふまのち

十一日唐参將れきちと色牛窓の津赤穂岬へ往
我乃ばなまをてゆく船あやふまのちのち中国
舟あやふまのちのちのち

十二日日和ありて舟あやふまのちのち余は細工
多く有る地き船あやふまのちのちのち
溪より舟を溪風をまづく七八鳥亀松葉子
あやふまのちのちのちのちのちのちのち
舟あやふまのちのちのちのちのちのちのち
れりふまのちのちのちのちのちのちのち

日れりふまのちのちのちのちのちのちのち
ゆふまのちのちのちのちのちのちのち
二里半船路の城あり入口の仙波といふありて昼食を
ハッパとにふれり橋を渡りて見附の門をへり町家
すまふまのちのちのちのちのちのちのち
田園ありて遠きところありて入口より大
門ありて町家とすして津廊の中に囲入るハ他處
稀なるまゝとして西南れすといふ天のちのちのち
廣大に市店ありて草花れりといふのちのちのち
舟あやふまのちのちのちのちのちのちのち

長山行記

長山行記

文哥行張田中

是を奥比院と云ふ。一、八寺領二万五千石。三、此
院後有比叡山。伯仲なりし。次、次に表（野）
豊太岡と云ふ。城と云ふ。今、八、八、百、五十石。諸寺
堂、并し坊舎、悉く、多れども、山陽通より一の伽藍
なり。山の上、五、此、院、を、守、月、を、守、と、云、ふ。
坂、本、も、と、云、ふ。伽藍、を、守、と、云、ふ。は、の、ま、ま、と、云、ふ。
と、云、ふ。ま、ま、と、云、ふ。は、の、ま、ま、と、云、ふ。は、の、ま、ま、と、云、ふ。
と、云、ふ。ま、ま、と、云、ふ。は、の、ま、ま、と、云、ふ。は、の、ま、ま、と、云、ふ。
と、云、ふ。ま、ま、と、云、ふ。は、の、ま、ま、と、云、ふ。は、の、ま、ま、と、云、ふ。
と、云、ふ。ま、ま、と、云、ふ。は、の、ま、ま、と、云、ふ。は、の、ま、ま、と、云、ふ。

大正天皇御即位
一、大正天皇御即位
二、大正天皇御即位
三、大正天皇御即位
四、大正天皇御即位
五、大正天皇御即位
六、大正天皇御即位
七、大正天皇御即位
八、大正天皇御即位
九、大正天皇御即位
十、大正天皇御即位



大正天皇御即位
一、大正天皇御即位
二、大正天皇御即位
三、大正天皇御即位
四、大正天皇御即位
五、大正天皇御即位
六、大正天皇御即位
七、大正天皇御即位
八、大正天皇御即位
九、大正天皇御即位
十、大正天皇御即位

大正天皇御即位
一、大正天皇御即位
二、大正天皇御即位
三、大正天皇御即位
四、大正天皇御即位
五、大正天皇御即位
六、大正天皇御即位
七、大正天皇御即位
八、大正天皇御即位
九、大正天皇御即位
十、大正天皇御即位

大正天皇御即位
一、大正天皇御即位
二、大正天皇御即位
三、大正天皇御即位
四、大正天皇御即位
五、大正天皇御即位
六、大正天皇御即位
七、大正天皇御即位
八、大正天皇御即位
九、大正天皇御即位
十、大正天皇御即位

大正天皇御即位
一、大正天皇御即位
二、大正天皇御即位
三、大正天皇御即位
四、大正天皇御即位
五、大正天皇御即位
六、大正天皇御即位
七、大正天皇御即位
八、大正天皇御即位
九、大正天皇御即位
十、大正天皇御即位

長山イイ言



古

旅人のくけりかたを記す

大々々々乃々々々乃々

平心石象經冊

けりてふめふけを
 ちかきやうひのあし

一

松雲山坪寺原右圖

今も忠度のゆれをうけ

[illegible]

忠度墓圖

傳風雅名

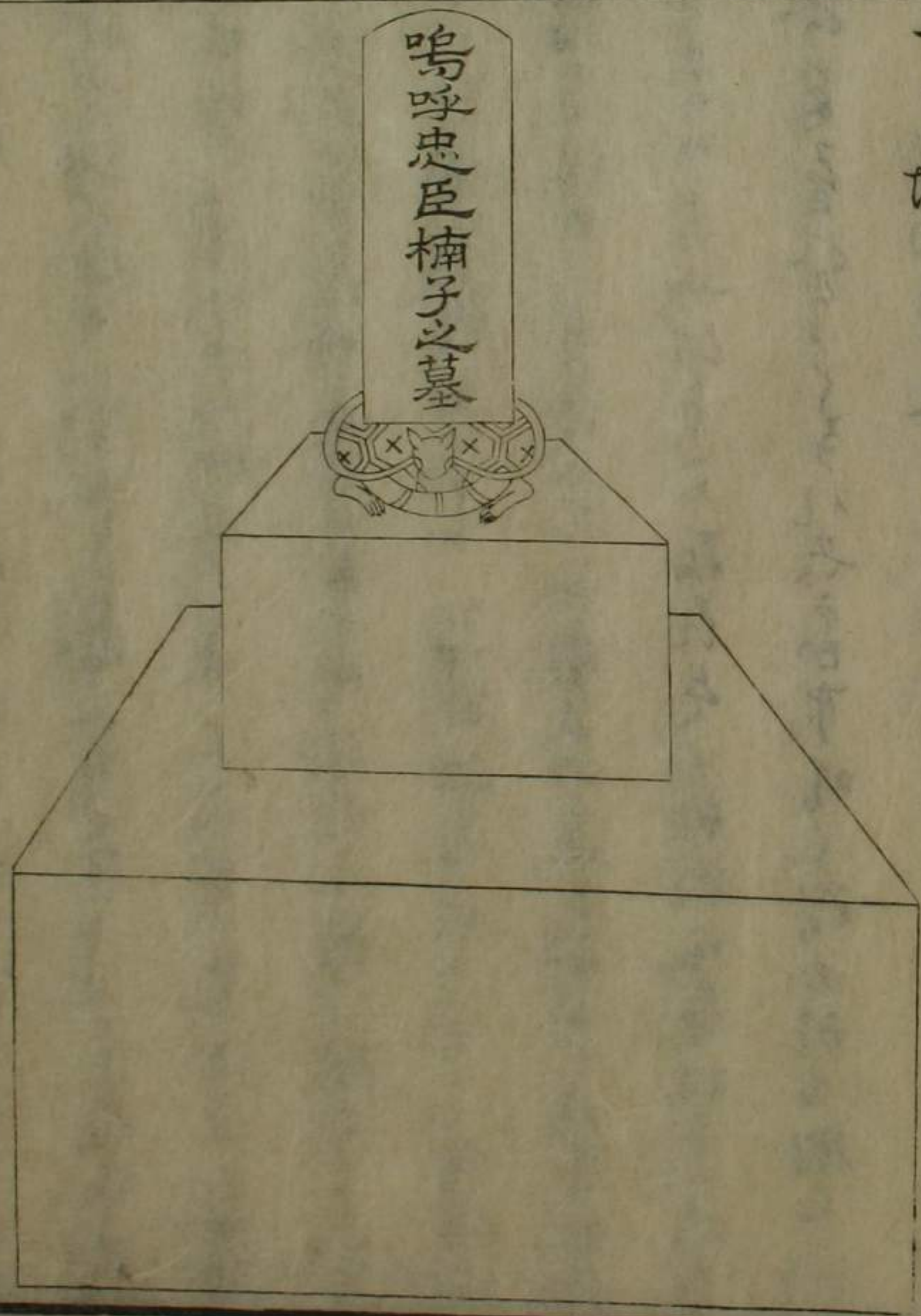
このとき、
城下乃所臨也、統略もをふまきといふ、解ハ其時
源忠國とある中にもそのあは、此傳の報より得
面々題す、予に又つ録せしむ。



一、新行錄

24

石壁に小峰を内建しと云ふの跡の跡遺し
と云ふ事なれ事と云ふは、
日もしもと云ふ事と云ふは、
乃来運寺に云ふ事と云ふは、
小姓と云ふ事と云ふは、
昨日未だは、
水なし、
高し、
我、
碑ハ大、



碑石，望之尺九寸，橫一尺六寸，厚一尺，背石也。中坦，堅二尺六寸，橫六尺，下坦，堅五尺，橫一丈，背白石也。碑面

碑文曰

忠孝著于天下日月麗乎天
地無日月則晦蒙否塞人心
廢忠孝則亂賊相尋乾坤反
覆余聞楠公諱正成者忠勇

陽王公ハゆゑとなふ事、古外に因るはゆゑに
貴氣をなにも

題布引飛泉

千尋布帛色長瀑
玊山隈織女機中物應下

從銀藻來

田舎に福を願ふ
うーん、うーん、うーん、うーん、
うーん、うーん、うーん、うーん、
うーん、うーん、うーん、うーん、

大和
菟名負處女

すも龍ぬきあふあけんは
のまにこれくたの川ハ名のみ
ふりりり

右の方此海邊に石村といふ所に求馬とて唐十
年ほどにわたり山に立寄る女^{ヲトメ}と二男子
乃とけとけとてあけし、あけの者小山田を所
うとてふとて^{カシ}成^{カイ}快^{カイ}少^{カイ}かに、乃とて六甲山を境
ふ富士より又あけ乃とて、也、清龍の集、鳴尾海、若

右方
たうと又うちんは
のふれ近所のふれ又ふれ
ふれをふれ

2
 今やいふや此方の山
 もみしれ鳴尾の沖
 ときどき

2
 意を以て持てんやと云ふ
 如く云ふと母を以ては
 中々なくして

二
三條にあり 此のちなる
みゝにゆきしなり
時

又
 藝使あるなりけり
 伊ふも今にわつたをいふ
 たふん

尾花里、武庫山、人多、和奇の名處なり、よのより
 少も住者やいふ所あり、明神へ参詣せし、おのふりて午
 飯し、居候より河より、傳法とすき、芦金鴨の下成
 たり、蒲生のふとを居り、日本橋乃下へ着、長町れたるや
 ぬやとれ

廿一日は、見のほろれぬを、或艘かゝりて、予らと舟より
十二人輜二つあり物多けむ、ゆゑふ外事もあらずに
ちし時食事して日午橋より乗出し、高き橋天
満臨れ下へゆる溪川を流る、はく城郭を圍むを
是ハ長松れ種々の鹿^{ヤク}雄^ヲ樓閣、雲烟を宮々、大守れ

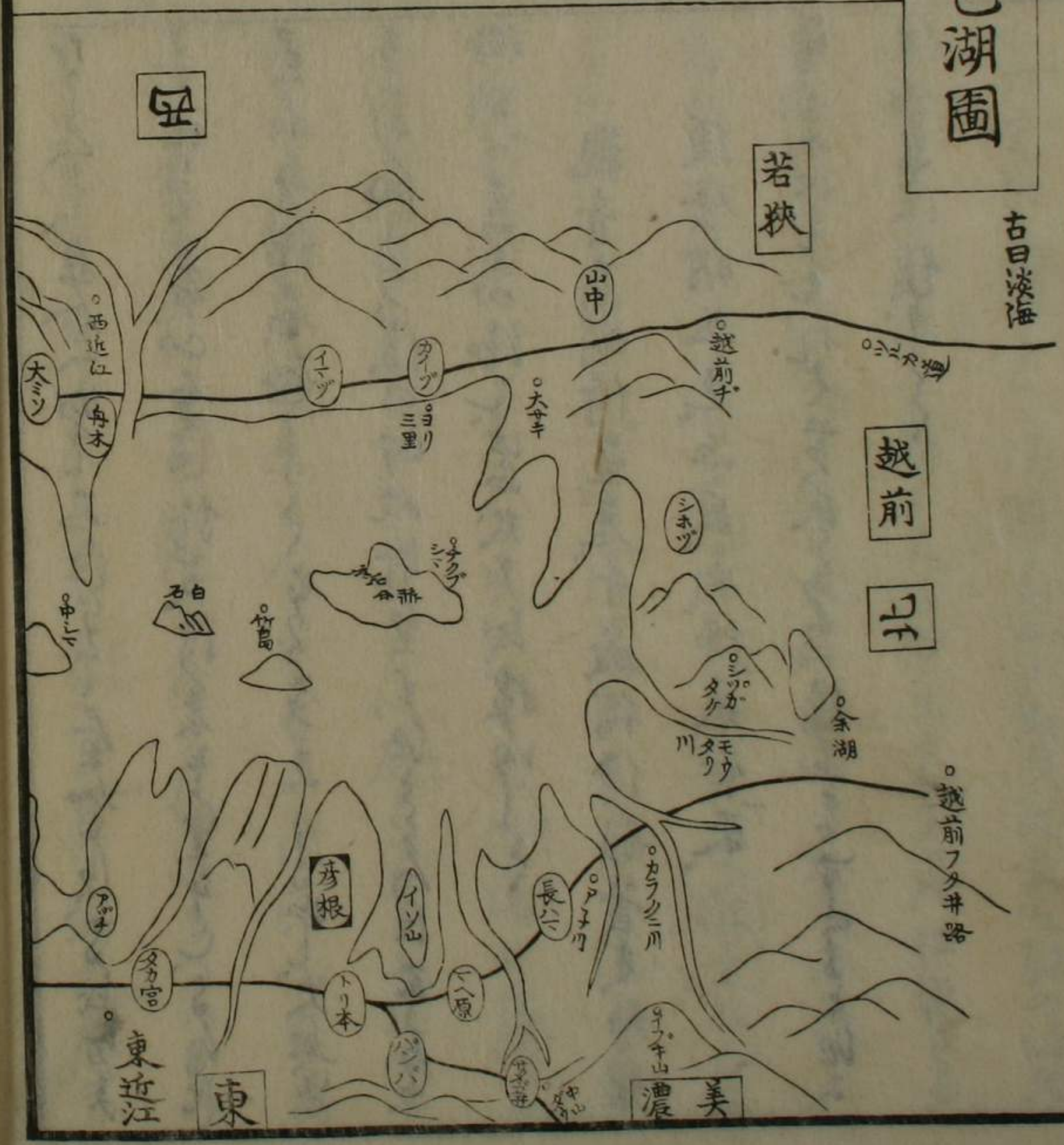
近江國琵琶湖圖

古日淡海

若狹

越前

越前ノタ井路



勢田橋上夕陽斜、風度孤村收晚霞、三井
鐘聲聞野外、石山月影映江涯、歸帆片片
過蘆荻、高嶺峨々開雪花、雨後唐崎松樹
色、數行鴻雁落汀沙、

詠八景

長中行

橋邊日落片帆回、雪映江山初月開、霧霽
雁鳴鐘二響、松風猶似雨聲來、

さうハ昔はうやうやしく、東へ出りし人の影も
てまゐる

廿三日ハ坂の下に宿す、廿四日ハ坂の麓を以て

よりて海へ、さうハ海へ、さうハ海へ、さうハ海へ、
廿四日、東へ、さうハ海へ、さうハ海へ、さうハ海へ、

廿五日、海へ、さうハ海へ、さうハ海へ、さうハ海へ、
乃宮人、海へ、さうハ海へ、さうハ海へ、さうハ海へ、
に宿す、海へ、さうハ海へ、さうハ海へ、さうハ海へ、
と宿す、海へ、さうハ海へ、さうハ海へ、さうハ海へ、

廿六日、海へ、さうハ海へ、さうハ海へ、さうハ海へ、
廿七日、海へ、さうハ海へ、さうハ海へ、さうハ海へ、
廿八日、海へ、さうハ海へ、さうハ海へ、さうハ海へ、
廿九日、海へ、さうハ海へ、さうハ海へ、さうハ海へ、

仙人の影も
さうハ海へ、さうハ海へ、さうハ海へ、さうハ海へ、

茶などいよく寝たりしに

廿七日 漢雲よりや

廿八日 新坂

廿九日 丸子宿川の邊に本屋を建てて
石表あり、連寄原宗長乃齋蹟なり、いふ
月と高し、使ふ路をさしぬんとて、少く
うへに大相山といふ山あり、山頂に
しを所あり、本屋寺といふやうなり、
何れかともいふ。設もなし、宗長の墓あり

宗長は少時死に、四人が仕
へ、川義忠、子孫を授け、文政後
出立、春一休、得少、水口元平
が居り、各各自号、本屋に
あり、住居乃と云ふに
宗長
山崎家

是より、七早と云ふ山あり、山頂に
長の墓あり、山ぬれ、山の隅に塚あり、
石塊なり、いふに、墓の、厨下に入、
住持の、山の、山あり、宗長は、
金なり、いふに、山あり、
て、山あり

山崎家、山あり、久能山といふ山あり、
所乃中、山あり、山あり、八幡宮の
山あり、山あり、山あり、山あり、
山あり、山あり、山あり、山あり、
山あり、山あり、山あり、山あり、

茶など流く時より始り記す

廿七日 漢雲よりや

廿八日 新坂

廿九日 丸子宿川の邊に本屋を建てて居りし
 石表あり、連子源宗長乃齋蹟なり、いふに
 月と高し、使ふ所をさしぬんとせむといふ
 うろく、こゝ所より左の方には村八木家あり、お
 月にて大相山といふ所あり、又、漢雲乃齋蹟あり、
 しを所あり、本屋寺といふやうなり、これなど
 何れかといふも、説もなし、宗長の墓なるをいふに

宗長は少時、既に四人、初仕
 本門義忠、字孫、名、種、文、然、後
 出、家、春、一、休、得、少、水、元、元、年
 小、居、子、家、各、自、号、は、本、屋、寺
 初め、住、居、乃、と、ま、り
 宗、長
 山、は、く、作、り、ま、す、と、い
 う、事、な、り

是より、七、早、也、といふ、泉、も、を、唯、め、の、な、り、宗
 長の墓なるをいふに、ぬれん、左の隅に塚ありて、きよめ
 石、魂、も、ぬ、れ、に、是、の、こゝ、厨、下、に、入、り、茶、を、さ、し、
 住持の、もの、の、り、り、り、宗、長、れ、親、を、節、切、す、を、
 金、な、り、何、や、といふ、も、は、宗、長、の、名、を、い、ま、れ、は、な、り
 て、い、ふ、事

唯、日、強、く、な、り、久、能、く、い、ま、あ、ら、ん、と、い、ひ、人、は、強、く、
 所、乃、中、に、い、た、ま、わ、れ、く、八、幡、の、邊、に、
 こゝ三里は、う、り、い、ま、れ、は、海、の、邊、に、防、令、八、院、を、
 建、は、ら、な、り、清、康、の、八、幡、原、を、越、す、を、い、ふ、事

聲折

自三保望富士山

清見寺山
帶巨壑故
三四及此

白玉撐天，聳青嶽，傍海開。巨黿背上，色可

信是蓬萊

おのゝきあゝれ人の宅は^{ふかく}橙多し、^{サウタサニ}蓬萊^{サニ}の山は
 升る處にまはれとまはれくも、^{サニ}海樹^{サニ}は似く
 雲ハ^{トナ}様はにやう、^{サニ}海樹^{サニ}はにやう、人のつゝく大
 風なれ代りになるも、さうも^{サニ}蓬萊^{サニ}はなほ
 ナニ月朝日と^{サニ}蓬萊^{サニ}はなほ、^{サニ}蓬萊^{サニ}はなほ、^{サニ}蓬萊^{サニ}はなほ
 小石の邸につく、^{サニ}蓬萊^{サニ}はなほ、^{サニ}蓬萊^{サニ}はなほ、^{サニ}蓬萊^{サニ}はなほ
 とも、^{サニ}蓬萊^{サニ}はなほ、^{サニ}蓬萊^{サニ}はなほ、^{サニ}蓬萊^{サニ}はなほ、^{サニ}蓬萊^{サニ}はなほ
 れて^{サニ}蓬萊^{サニ}はなほ、^{サニ}蓬萊^{サニ}はなほ、^{サニ}蓬萊^{サニ}はなほ、^{サニ}蓬萊^{サニ}はなほ、^{サニ}蓬萊^{サニ}はなほ
 流るる、^{サニ}蓬萊^{サニ}はなほ、^{サニ}蓬萊^{サニ}はなほ、^{サニ}蓬萊^{サニ}はなほ、^{サニ}蓬萊^{サニ}はなほ、^{サニ}蓬萊^{サニ}はなほ

曆二冊を^{サニ}蓬萊^{サニ}はなほ、^{サニ}蓬萊^{サニ}はなほ、^{サニ}蓬萊^{サニ}はなほ、^{サニ}蓬萊^{サニ}はなほ、^{サニ}蓬萊^{サニ}はなほ
 ナニ月朝日と^{サニ}蓬萊^{サニ}はなほ、^{サニ}蓬萊^{サニ}はなほ、^{サニ}蓬萊^{サニ}はなほ、^{サニ}蓬萊^{サニ}はなほ、^{サニ}蓬萊^{サニ}はなほ
 うち、^{サニ}蓬萊^{サニ}はなほ、^{サニ}蓬萊^{サニ}はなほ、^{サニ}蓬萊^{サニ}はなほ、^{サニ}蓬萊^{サニ}はなほ、^{サニ}蓬萊^{サニ}はなほ

萬里行程西海隈、風霜無恙故園回、江山
 踏盡為何事、不是張騫博望才、

明和四年丁亥冬十一月 常州水戸長玄珠記

赤水先生著述出版書名

改正日本輿地路程全圖
唐士歷代沿革圖

全重鐫縮圖
大清廣輿圖

地球萬國圖說
禮記王制地理圖說

和蘭新譯地球全圖
五常圖說

清槎唱和集
唐詩平仄考

是紀行中清客贈答詩文
天象管窺抄

標註
圖重
東輿紀行
漢文
附
真羽名山北越七奇
諸州言碑攷

文化歲在乙丑孟春

東武
小倉仁兵衛

京都
林伊兵衛

御幸町御池
藤井孫兵衛

攝城
心齋橋唐物町
本太助

同安堂寺町
田邑九兵衛

高麗橋一丁目
淺野弥兵衛

